

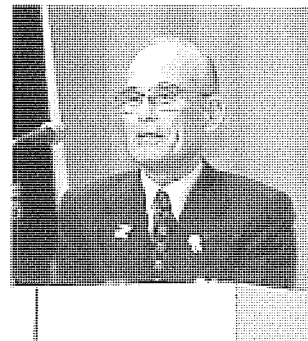
対談 21世紀のロータリー



パネリスト
天野パストガバナー



コーディネーター
筒井パストガバナー



パネリスト
南園パストガバナー

筒井パストガバナー

みなさん、こんにちは。私は1994-95年度の
パストガバナーを務めました筒井藪三でござ
いまして、今日は天野パストガバナーと南園
パストガバナーのロータリー対談のお世話と
申しますか、司会をおおせつかりましたわけ
でございます。天野パストガバナーは地区の
研修リーダー、南園パストガバナーは国際研
修リーダーとしてベテランであり、私はこの
方面の経験がきわめて未熟であります。我々
は一生懸命皆さまの期待に応えるように頑張
りますので、最後までご協力のほどをよろし
くお願いいたします。

9月の中旬に3人で集まりまして、どのよ
うな方向に進めたらいいだろうかと考えまし
たところ、「そう堅く考えないで愉快地にやりま
しょう、筒井さん、あなたが話をうまく引っ
張り出すようにしてくれれば」ということにな
りましたので、今から私の勝手なプログラム
によって進めさせていただきます。その前
に、土肥ガバナーにこのプログラムを設定さ
れた目的は一体何でございますかと伺いまし
ましたところ、土肥ガバナーいわく「20世紀
最後の大会です。私は20世紀最後のガバナー
であると同時に、21世紀初代のガバナーにな
ります。ロータリーは1905年ポール・ハリス
によって創立されましたが、その95年間の
間に非常に変遷し、発展を遂げてまいりました。
しかし、21世紀を迎えるにあたりまして変え

てはいけないものと、変えていかなければなら
ないことがあるということ、20世紀のロー
タリーを総括して、21世紀のロータリーに
示唆を与えていただきたい」と、こういうふ
うなお気持ちでございました。それじゃあと
いうことで、まずわれわれがお互いに入会し
た時のロータリー、そして現在のロータリー
を比較しまして、どのように変わってきたか
というロータリー観を語っていきこうじゃな
いかということになりました。

まず私のロータリーに入りました動機で
ございますが、私が入会したのは1961年
(昭和36年)でございました。この1961年は、
奇しくもこのたびR.I.会長代理としてお見え
になりましたキャリックさんの入会と同じ
年で、ちょうど私と同期のロータリアンとい
うことになります。昭和35年、わが社にも労
働組合が結成されまして、それまで家族的
経営といいますか温情経営をもって進んでき
ましたところ、いったん労働組合が結成され
ますと、なかなか今までのように思うよう
にまいりません。孤独の生活が続くようにな
りました。その時友人から、ぜひロータリー
に入って勉強したらどうか、友人をもっと
広げたらどうかという勧告をいただきまして、
翌年の2月1日に入会したような次第でござ
います。ロータリーに入りますと、異業種
の皆さんが非常に多く、特に私と同年代
のある会社の社長がおりまして、本人は
それより2・3

年前に労働組合が結成されまして非常に苦勞した経験者でございました。私はすぐに本人と無二の親友になりまして何でも話し合うことができるようになりました。そして本人から教えられて非常に企業経営に貢献した記憶があります。それが私の動機であります。天野パストガバナーは1977年12月に福山ロータリークラブに入会されました。南園パストガバナーは1978年5月に防府ロータリークラブにお入りになりました。それではロータリーにお入りになった時のロータリーそして現在のロータリー、あるいは入会の動機などにつきまして、天野パストガバナーからご発言をお願いいたします。

天野パストガバナー

福山ロータリークラブ所属の天野でございます。きのう新入会員のプログラムということで講師として30分近い時間しゃべらせていただきました。その時、ロータリークラブへの入会の動機ということを若干お話をしたのですけれども、6項目くらい挙げたかなという記憶があります。私は親父から勧められてクラブに入りました。それはなぜかと申しますと、当時松本パストガバナーをはじめクラブの長老の方々が、少しくラブを大きくしなきゃならん、将来もう1人ガバナーを出すぐらいなら100人くらいにしようじゃないか、それで自分の息子を入会させて人生教育をしながらロータリアン増強にも寄与する、一挙兩得じゃないかと、まず天野さんお前の息子を入れるということで、入らせていただきました。私に続いて松本さんのご息も入られるかなと思っておりましたら、3年くらい2世の方が入れられませんでした。ただ今、みなさん努力をされて2世の方が10人くらい入っておられます。私はロータリーに入る前に実はロータリーのことを知っておりました。それは親父がクラブのお世話をさせていただきましたし、松本パストガバナーがガバナーになられた時に福山で地区大会をしましたが、その時の実行委員長を務めさせていただきました。ロータリーというのは色々忙しいんだなと

いう気持ちを、そばで見て持っておりました。ところがある日、私は書店を歩くのが趣味でありまして、ある書店で「無人灯」という本を見つけました。これは「ロータリーの友」にも書かせていただいたのですけれども、宮崎交通の会長をなさっていて亡くなる前はロータリアンでありましたけれども、岩切章太郎さんという方が書かれた本なのですね。私も事業経営者の端くれになろうと考えていましたので、なんとなく当時宮崎交通の会長のなさっていたことが新聞に出たものを讀んだことがあります。名前だけは存じ上げておりましたので、本屋で本を手にとりました。パラパラッとめくってみましたら、なんとロータリーのことが何か所も書いてあるんですね。一番目についたのが、職業奉仕ということでありました。自分の職業について語っておられました。同時に色々な比喻をその中にちりばめられて、職業奉仕というのは、ロータリーはすごいんだなと、とても哲学的なものを持っているなどそう思いまして、親父が入会を勧めてくれた時に、もう一も二もなく入りました。私は他の奉仕団体とか、一時青年会議所に入りたかった時期もあったのですが、もう38歳で、40歳で卒業かなということで断念しましたけれども、ロータリーという団体の中で、私は育てられたなど、色々な方にお世話になったと思います。今になってガバナーもやらせていただいて大変良かったと、そして同時に、ロータリーで学んだ職業に対しての色々な考え方、これが今になって役に立っているなどそのように思います。今日、私の個人的な話がみなさんにどれくらい受けるのかわかりませんし、今のロータリーに入られた方がどのように感じられているかはわかりませんが、当時のロータリーは極めて厳しかったと思います。先輩の前でピリピリしておりました。何を話していいかわからない、話されることが逐一心に入ってくるんですね。ロータリーは素晴らしいな、そして厳しいなと思いました。まず入りましてから、小郡のロータリー情報研究会に、高杉先生と上杉さんお二人の大先輩に連れてい

かれました。一杯飲まされながら、ロータリー談義を聞き、さらにその翌日に千宗室さんが来られてセッションをやりました。私にとってはこのロータリー情報研究会が、入ったばかりでしたのできわめて勉強になりました。そういう機会が現在あるかどうかは別として、私にとっては当時のロータリーの先輩というのは素晴らしい人たちだったな、そしてきわめて厳しく、背中を見て育てという感じでしたし、失敗をしましても、それを一つ一つ受けとめてもらえた、そのような感じもします。また、遊びについても、今日は松本パストガバナーがおられませんかとお話しますが、一緒にゴルフにでかけたわけですね。色々な世間話を教えてもらえたんですね。私のような世間知らずの者にとっては非常に良かったと思うんですね。例えば私はゴルフが下手なんですけど、「天野君、今のショットはイナゴの小便じゃ」と。下世話ですみません。「イナゴの小便って何ですかね」「イナゴが田んぼに小便すれば大したもんじゃ。今のお前のショットは大したものだぞ」と、そういうふうな感じでしたね。次のホールで一発打ちますと、「天野君、今のは奈良の吊るし柿だ」と。そういうちょっとその場にそぐわないかもしれせんけど、私自身が感じてなかった世界を、当時の先輩は教えてくださったんですね。そういうことで、先輩と非常に親しく付き合わせていただいたことが、今になって大変役に立っている。ただ、松本さんに言われました。「これからはお前がみんなを引っ張っていかんやいかんのだ」と。ところがなかなかできないんですね。そういう全人格的なものが自分に備わらなければ、ロータリーに入られた新入会員の人を引っ張っていくということはなかなか難しい。ただ、そういう素晴らしい先輩に会うことができる、それがロータリーの良さかなと今でも思っております。

筒井パストガバナー

ありがとうございました。それでは南園さん、時間が少なくなってきましたから、5分くらいでまとめていただくよう、お願いいたします。

南園パストガバナー

私は1978年にロータリーに入らせていただきました。実はその前の昭和50年に、私は胃ガンの手術をしまして、果たしてこれで生きていけるのかという、苦難の時代がございまして、そういう不安定な気持ちの中で、ロータリークラブに誘われて入会いたしました。やっぱり心の隙間をどうやって埋めていくかという気持ちがあったのじゃないかなと思うのでございますけれども、端的に申しますと、ロータリーに入って良かったなという気持ちを十分に持っております。1978年と申しますと、国際ロータリーではレヌフさんという方がR.I.会長でございました。今日R.I.会長代理で来られましたキャリックさんの先輩でございまして、キャリックさんはすでにその時ガバナーをやっておられましたし、レヌフさんは「Reach out」(手をさしのべよう)というR.I.テーマ、素晴らしいテーマを提唱された方でございますし、同時に「3Hプログラム」、保健、飢餓追放、人間性尊重という問題にもっと真剣に取り組んでいこうと提唱された方でございます。ロータリーの歴史百年を考えてみますと、だいたい4つに分けられると思います。25年ずつ分けますと、最初の25年は1930年までですね。ですからポール・ハリスが始めてロータリー連合会になり、そして国際ロータリーになり、そして4大奉仕も完成して組織ができあがったのは、ちょうど25年たった1927・8年ごろでした。つぎの25年は空白の時代です。戦争がございました。しかしですね、そこでみんなは戦争の苦難を味わいながらも、本当の人間性とは何なのかと、そして人間を尊ぶにはどうしたらいいのかと真剣に心の中で考えた時代。ですから、そういう考え方が国連の憲章にも生かされておりますし、ユネスコの発足の時にもロータリアンが参画してそういう考え方を述べて、ロータリーの理想というものをそこに盛り込んだわけですね。ですから次の25年間は、やはり勉強の時期と申すまいでしょうか、そういう苦難の時期だったわけです。ポール・ハリスが1947年に亡くなりまして、ロータリー財団

活動というものが本格化します。1955年がちょうど30周年ですけども、だいたいその時ハーバート・テラーが会長なのですけれども、その頃からロータリーの活動とは何かと、そうやって培ってきたロータリーの理念を具体的な活動で展開しようという時期に入ってくるのです。ですから、例えばロータリーの国際親善の奨学生にしましても、1960年ごろになりますとインターアクト、ローターアクトそしてGSEといったものがどんどん出てきます。ですから1978年私が入った頃というのは、そういう活動というものがあ程度定着をしてきた時代と、私は考えております。それから今度はそれに魂を盛る、内容を盛る時代がその後25年間であろうというふうに考えております。ですから私は後半のちょうど節目にロータリーに入らせていただいたと、そういうふうに考えてもいいんじゃないかと思っております。この地区ではちょうど広沢ガバナーの時、そして白井さんの時ですね。そしてその次が白石パストガバナーの時なんです。ですからそのころは、実は地区分割が行なわれた時代なんです。369地区というのが271地区になったんですね。そして271地区は分割をされました。このような地区大会の中で地区分割の問題点は何かという真剣な討議が行なわれた時代でございます。現在はですね、地区統合の時代だということが提唱されておまして、昨年のロータリーの理事会では2700人で75クラブで大きな地区を作って効率的にしようという逆の考え方に変わってきておりますし、ロータリーというものが、もっとグローバルな意味で発展しつつあると考えておりますので非常に感無量というところでございます。具体的なことはまた後でお話したいと思っております。

筒井パストガバナー

ありがとうございます。それでは、さきほど申しましたように、ロータリーは1905年ポール・ハリスによって創立されて、当時は職業奉仕からスタートを切ったと言っても過言ではありません。職業奉仕から社会奉仕へ、

社会奉仕から国際奉仕へ中でも昨今は世界社会奉仕へと大きく変遷してまいりました。その推移につきまして、天野パストガバナーからお願いいたします。

天野パストガバナー

ロータリーの歴史を語ったり、その変遷を語るということになりますと、現在2710地区では国際協議会のグループディスカッションのリーダーをされてる南園さんが一番最適かなと思うんですね。お互いの割り振りを考えながら、これは南園先生お願いしますよということにしたわけなんですけども、コーディネーターの独断と偏見でこっちに振ってこれたんですけど、もう時間が限られていますから、自分が好きなどころだけ、気に入っているところだけお話ししたいと思います。それはもちろん1905年にポール・ハリスがロータリーを作ったと、ただ彼は歴史を見てみますと、5年くらい前からそういうことを悟っているとか考えているんですね。その5年間で彼の中できっちりお酒のように醸成されたといえますか、5年たって彼のとった行動というのはきわめて素早く、果敢であったなと私は思っております。ポール・ハリスはやはり考える人だなと、考えることが非常に大事だなと思うんですけど、そういうポール・ハリスの特徴がロータリーの中に出てくると思うわけです。その時に彼が掲げたコンセプトというのが4つくらいあるかなと思うんですけども、その3つはいまだにロータリーの中に残っているんですね。社会の優れた構成員を会員にしようじゃないかとこれは昨日もお話しさせていただいたんですけども、その中で「瑕疵なき会員」(IN GOOD STANDING)これ僕は素晴らしい言葉だなと思っております。それから「一業種一会員」、これはいまだにこの特徴をロータリーが持たないと、何の意味もないと思うほど大切な特徴だと思うんですね。それから「会員の親睦」、これは歴代のR.I.会長がおっしゃってますね。親睦はロータリーの力のプールなんだと、人材のプールなんだと言われてるぐらい

ですから、親睦なくしてはロータリーの力は生まれて来ないと思うんですね。その「優れた構成員」「一業種一会員」「会員の親睦(ENJOY ROTARY)」、これが今もロータリーの中にずっと生きているということは、これを全面に出す限り、ロータリーが21世紀も奉仕団体として素晴らしい力を維持するかなと思うんです。ところが今ちょっと気になることがあります。私のクラブは今、松岡さんというお医者さんが会長なのですが、松岡先生が時々言われるんですね。「昔は『相互扶助』(BACK SCRATCHING)がロータリーの中に持っていた、今はそれが全然ない。ところがこの経済不況の中で会員がやめていかざるを得ない。なぜ天野さん、「今の会員というのは自分の仕事をきっちりみんなに話ができないかな、相談ができないかな」と。これは山田パストガバナーも言われました。突然自分のクラブの会員であったオーナーが倒産して逃げられたんですね。この過程に至るまでには相当の時間があつたと思うんですね。それはクラブの会員に相談がなかったと。昔は親睦を通じて自分の仕事も語り、時には助けて欲しいということも素直に言えたんだと思うんですね。今のロータリアンは少し気取ってると思うんですね。仕事を語らないんです。クラブの例会で自分の仕事を語るべきだと思うんですが、語ろうとしない。まして奉仕もあまり語らないですね。「奉仕はめんどくさい」という気持ちがクラブの中にあるんじゃないかと私は思いますね。それはさておいても、いずれにしても我々は一緒に、仲間ですから、自分の仕事を語って行って、その仕事の中で色んな知恵を仲間から授けてもらうことはロータリーの特色の一つとして生かしていくべきかなと思います。奉仕もそういうことでないとなかなか難しいと思うんですね。自分の事業ができてこそ、やはり奉仕もできるわけですから、そのことを今21世紀を迎えるにあたって、今特に事業経営者が一番困っている問題だと思いますから、そういう中でお互いの力を発揮できる場がロータリーであるということのを再認識してみる必要があるかなと、

そのような印象を持っております。まあ色んな意味でその後語りますとですね、時間がいくらあっても足りません。これは南園パストガバナーが綱領の変遷ですとか色々お話しになると思っていますので、理論的な面は語っていただきたいなど。ただ、キャリックさんにも後、時間があればお伺いしたいんですけども、オーストラリアのロータリークラブにも色んな職業人がいると思うんですが、友達が困った時にロータリアンがどう反応するのか。事業経営というのは事業経営者の責任ですから。ただ、友人としてどうできるか、これが外国のクラブの中でどのような展開を見せているかということ、時間があればお尋ねしてみたいと思っております。

筒井パストガバナー

私がロータリーに入会した時には、山口県は九州に属しておりましたから、中国4県と兵庫県と四国4県の、合計9県で368区と申しておりました。1964年に山口県が一緒になりました。中国5県で369区、初代ガバナーが広島ロータリーの正岡さんでございました。1977年に広島と山口が一緒になりました、2県で271地区というふうに変遷してまいりまして、これは広沢ガバナーの時ではなかったかと思っております。1991年、これはたしか白木ガバナーの時じゃなかったかと思っておりますが、2県で2710地区ということになりました、現在に至っております。そのようになりまして、地区R.I.の組織も、地区の組織も非常に変わってまいりました。こういう方面には非常に詳しい南園パストガバナーから、地区の組織ならびにR.I.あるいは地区の組織とその運営の推移等についてご発表いただければと思います。

南園パストガバナー

その前にですね、ロータリーとは何かという基本概念というものをですね、しっかりと認識しておく必要があると思うんですね。やっぱりロータリーというのは人間を大事にする組織であるということが根底にあると私は思っております。ですから、HUMAN RELA-

TION, HUMANITYそれが一番根底にあるということ。人間の持っている色々な病気もそして環境もそして住まいも、そして地域もそして国際社会も色々な意味で関わりを持ってありますけども、そういうものの中で、私たちがいかに人間らしく生きるためにはどうすればいいかという考えが基本になくちゃいけないというふうにも思いますし、それが基本であろうと思っております。ですから例えばポール・ハリスが、友愛と親睦あるいは奉仕ということが基本になってスタートしましたけども、それをもっと色々な意味で大きな多様性を、寛容という言葉でまとめていこうではないかということ、彼は言いましたけども、その根底にあるHUMAN RELATIONというだけではですね、そういうことができない、あるいは実現があるいは奉仕が、不可能になってまいります。ですから一つの組織が必要になってくるし、考え方ももっとグローバルになってきますし、もっと効率的に組織的になってきて当然だと私は思っております。例えば倫理運動だけで、世界の平和が維持できるかといったら、そういうような感傷的な気持ちで果たして全世界の平和がキープできるのか、そういう基本的な理念というものをもちますね。そうするとそれを根底に置いておかつですね、我々が全世界の民族やあるいは人々が、宗教や言葉や色々な考えの違いを乗り越えて何かをするのであれば、もっとグローバルな意味での運動も組織も活動も必要になってくる。ですから組織というものは変化していかなくちゃいけない。奉仕活動の内容も社会に適応していかなくちゃいけない。そして変化していかなくちゃいけない。しかしその基本理念というものは、しっかりと根底にあるんだということ、ちゃんとわきまえた上での考え方でなくちゃいけないと私は思っております。従って物事を論議するときに基本的な足場、立場というものと、目標というものと方法というものを混同せず、それらをきちんと分けて、ロジカルに整理して考えるべきじゃないかと思えます。だから立場というものはもちろん理念であるし、ロー

タリーの綱領に盛られたあの4つの理想というものが根底にある、これは変えてはならない。しかしですね、現在においては色々な意味で変化していますから、そういうものに対応して適応していかなくちゃいけない。そういうような考え方が具体的に言いますと1989年の女性の入会、これは大きなポイントだったと私は思っております。その90年の大きなポイントはですね、やはりシェアシステムの採用です。これはロータリー財団というものと絡み合わせましてですね、ロータリーの資金の使い方というものを各ロータリークラブやロータリアンに還元しようという考え方で。だからみんなが自分たちのものであり、そして自分たちが作るのがロータリーなんだという考えをしっかりと持ちましょうねというのが、シェアシステムの一つの考え方であろうと私は思っております。ですから我々が寄付した資金の6割はDDFとして自分たちで使しましょう。そういう考え方がでてくる、これがシェアシステム。そしてその次に出てきたのが地区リーダーシッププラン。リーダーシッププランというのは1996年、私がガバナーエレクトの時に始まったんですけども、これも、膨大化するロータリー組織というものをいかに効率的に、そしてしっかり目的を達成させながら動かしていくにはどうしたらいいかという考えから生まれてきたのが地区リーダーシッププランでありまして、従来の考え方は別にしましても、現在の新しい組織というものを機能的にもっていかうではないかというのがこの考え方なんです。ですからこのリーダーシッププランがこれからどういうふうにかかされていくかというのは非常に重要な問題。新しい感覚でこれを取り入れてほしいというふうに思っております。最近になってからロータリー財団は「キャップ」というプログラムの制度を作りました。来年から始まりますけども、これは地域にサービスをする援助プログラムを始めようじゃないかと。ロータリーはどこか遠い所で遠い国で色々なプログラムが行なわれて、我々は金を出すだけだとそういう考えはやめてほしい、プログラ

ムのために金は必要なんです。金も必要ですけどプログラムはなお必要なんです。そのプログラムの中に国際的なグローバルな全民族や全世界をまとめるような大きな、例えばポリオプラスのような活動、それも必要。それから地域の足元の一つ一つを踏み固めて、そしてクラブがどうすれば我々が理想とすることができるとかということだと思えます。そこを考えてもらいたいと思えます。だから、財団の方も資金として援助しましょう、例え千ドルであっても一万ドルであっても、そういうささやかな所からみんなやっていけば、それが大事なプログラムであることが分かれば、それをもっと大きな地域あるいは国に広げていきましょう。そしてそれがまた国際政治に関わっていきましょう、それが堅実な考え方だと、だから組織を現代の変化に従って逐次ロータリーは考えてそしてそれを実行してきてるわけなんです。そこをよく理解してほしいと思っております。

筒井バスターガバナー

誠にありがとうございます。それでは最後になりますが、本日の対談のキーポイント「21世紀のロータリー」に今から入りたいと思えます。我々はロータリアンであると同時に日本人です。日本人ロータリアンとして21世紀にはロータリーの奉仕活動をいかにすすめたらよろしいか、できるだけ具体的な例を挙げてご発表願えれば幸せに存じます。

天野バスターガバナー

最初土肥ガバナーから与えられた課題というのは、「21世紀のロータリー」ということではありませんでした。もっと突っ込んだ言い方でありました。要するにロータリーが生き残れるかという課題を、土肥ガバナーは我々に与えられたんですね。ロータリーが生き残れるかと南園さんとお話ししながら、生き残らなくちゃいけませんから、生き残れるかという課題は難しいなということで、「21世紀のロータリー」という形に変えさせていただきま

した。これはもうご承知のように、ダクターマンさんが委員長になられて、21世紀ロータリーはどのような夢を持つかということをやられました。レイシー会長さんの時だったんですね。でカルロラビッツさんになられて、あまりにも会員から集まった2千件以上になりますが、これは田中バスターガバナーが日本のロータリアンのロータリーに対する夢を国内のものをまとめられまして、それでもまとめても膨大でありまして、で、それを見直し委員会の中で18項目にまとめられたわけがあります。これを一つひとつ見てみますとさすがR.I.だなど、これからの国際ロータリーの目標とすべきものが、18項目の中にきちっとまとめられておると思えます。それをさらにつぶさに見ておると、10項目以上がいわゆる新世代といえますか、これから我々を支えていく世代、余談になりますが、今日観劇をいただいたのは、西条小学校6年生による「白壁の街」というオペラでした。田舎の町には、田舎といっははしかられますが、こんな素晴らしい生き生きした子がいるんだなど。それを見ながら、次にロータリーが課題としなきゃならんのは、やっぱり中心となるのは新世代、子供たちだと私なりに思っております。そういうことで21世紀のロータリーを考える時に、今の子供たちそして青少年をどうやって我々が、次の世代を支えるあるいは次の世代を支えてくれるロータリアンに仕立て上げるか、どうやって我々がその問題にアプローチすべきなのかと、そういうふうな課題を持つべきだと思います。南園さんは地域ということをおっしゃいまして、まさに我々ロータリアンが自分たちの地域に、もう一度熱心に目を向ける必要があるかなと思えます。今の福山市の状況、福山の方は歩いてみられたら分かると思うんですね。日中、茶髪であるかどうかは主義主張によると思うんですけども、子供たちの行動、物を捨てるのも何とも思わない、地面に座るのも何とも思わない、大人が前を歩いていても通せんぼしても何とも思わない。ところが場所を変えて彼ら一人一人と接触するとちゃんとマナー

が守れる。どこにこのギャップができての
 かなと思うんですね。これは教育の問題だ
 と思うんです。学校教育の問題だけではなくて、
 家庭の問題もありますし、我々が組織として
 直面しなきゃならない教育というものもある
 と思うんですね。我々地域のロータリーとい
 うのは、これからもっとどうやって若い人を
 育てていくかということに大きな力を注ぐ
 べきかなと。これはお金の問題じゃないと思
 うんですね。我々が職業上様々な活動をしま
 すし、またウィサープの問題、色んな活動
 もしますが、その中の問題の多くを、やは
 り若い人に割いていくということ、21世紀、
 特に今すぐにも我々は目を向けるべきだ
 と思います。確かに国際ロータリーのポ
 リオの問題もありますし、世界の貧困の
 問題もあります。しかし我々の地域をき
 ちっと見つめなければ、ロータリアン
 として、これから自分のクラブを存続
 させていくことも難しいかなと思
 うんですね。ですから色んな問題の中
 で私は考えるんですが、R.I.というの
 は我々に色んな問題を投げかけてき
 ますが、ライオンズクラブと組み
 なさいとか、あるいはソロプチミ
 ストも巻き込みなさいとか、色んな
 テーマやプログラムは上がってき
 ますが、我々が今すべきことは、
 これまで築いてきたロータリー
 のがっちりした特徴というものを
 崩したくない、崩したらロータリー
 としての存在意義はなくなると
 私は思います。そういうことで
 存在意義を持つにはやはり、奉
 仕団体、そして今までやって
 きた特徴を崩さずに後世に
 伝えていくということ、我々が
 しっかり見据えるべきかなと、
 そういう時代の転換期にある
 と思います。ですから、「パラ
 ダイム・シフト」という言葉
 がありますが、この21世紀
 を迎えるにあたって、やはり
 ロータリーはある種の転換
 期を迎えていると思うん
 ですね。世代は交替していき
 ますが、私と今の30代の方
 の考え方、生活の態度とい
 うのはまったく違うと思
 います。それらを融合して、
 21世紀のロータリーを
 どう考えるかと。本当
 であれば、60歳以上の
 人間がここで話し合う
 というよりは、この中に
 何人かは若い口

ロータリアンを入れて話すべきであった
 かと、今日西条の子供たちの踊りを見
 ながら思いました。大変雑で、中心
 点がぼやけていますけども、私
 なりに思うのはやはり、新世代
 という方向へロータリーの流
 れを変えていくということと、
 今までもってきたロータリー
 の特徴を壊さないということが
 非常に大事なかなと、その
 ように思います。

筒井パストガバナー

ありがとうございます。それでは
 同じようなことにつきまして…

南園パストガバナー

ロータリーは生き残るかという課題
 がございますけども、私はロー
 タリーが生き残るか生き残ら
 ないかという問題自身がおかし
 かなと思っております。よく、
 現在のロータリーは衰退の一
 途をたどっていると言う方が
 いらっしゃいますけれども、
 決して衰退はしていないん
 ですよ。活動はますます堅
 実にしっかりとやっております。
 資金も年々増大しているわけ
 でございます。ただ会員数が
 2~3%減少していますが、
 実質的なロータリーの活動
 というものは決して減退して
 いません。ですから私は21
 世紀になってですね、ロー
 タリーがますます発展して
 いくだろうと、そういう確
 信を持っております。なぜか
 といいますが、IT革命です
 とか色々技術は進歩してい
 くでしょう。しかしその隙
 間に何が大事なのか何を
 残していくか、ということが
 考え直される時期がくる。
 それはやはり色んな意味
 の人間関係であり、社会
 の組織をもっと豊かに
 ヒューマニティックに
 していくということ
 でもあると思うわけ
 でありますから、
 そういう意味で
 ロータリーが活躍
 する場というのは
 無限にあると思
 えていい。ですから
 自信を持って
 ください。ロー
 タリーは発展
 するんだとい
 う一つの確
 信を持って、
 行動していく
 ことが大事
 だと思います。
 この間ハン
 チントンとい
 う人の「文明
 の衝突」とい
 う本を読ま
 したら、21
 世紀は文明
 が衝突して
 ばらばら
 になって、
 各文化や
 民族とい
 うものが
 全部色んな

意味で対立化して詳細化して
 いくんじゃないかという
 意見もないことはござ
 いませんし、また逆にも
 っと文明が包括化され
 て、そして共生と交流
 というものが主体にな
 るんだという意見も
 ございます。私はその
 両方だと思うんです
 けども、どちらかとい
 うと交流と共生とい
 うものが、これから
 ぜひさかんになって
 ほしい、そしてお互
 いの違いを認めあ
 ながら、地域でも
 国際の中でお互
 いにそれを理解し
 あって、そしてその
 中から一つの生活
 の場というものが
 豊かに生まれてい
 くんだという考
 え方をぜひしてい
 きたいというふう
 に、思っております。
 ロータリーはそ
 ういう意味で活躍
 する場は十分あ
 ると。そしてさ
 っき天野パスト
 ガバナーが言
 われましたよ
 うに、やはり
 現在の基本的な
 基調というものを
 崩さないでほ
 しい。これはもう
 当然なんです。
 私は国際協
 議会にリーダー
 として行って
 感じますこと
 は、やはりみな
 その根という
 ものを真剣に
 考えているとい
 うことです。ど
 ういう奉仕活
 動の中にも超
 我の奉仕とい
 うのを守りま
 しょう文章が
 必ず入ってま
 す。ですから
 基本の理念とい
 うものは変わ
 っていない。そ
 して特に綱領
 を大事にしよう
 という原点も
 変わっていない
 ですね。ですから
 これを基本に
 して、交流・共
 生そして、色
 んな意味で奉
 仕活動を友好
 的にしていけ
 ばいい。例
 えば社会奉
 仕、国際奉
 仕、職業奉
 仕とわかれて
 いても、本
 当はもう色
 んな意味で
 交流している
 わけです。あ
 る時は職業
 奉仕であ
 っても、ある
 面を見れば
 国際奉仕に
 なっている
 わけです。社
 会奉仕でも
 同じこと
 なんです。だ
 からやはり
 これは交差
 しているわけ
 です。4大奉
 仕は交流して
 いますよとい
 うことである
 し、綱領の4
 つも独立した
 ものじゃ
 ないんです。
 お互いに交
 流しているん
 ですよ。だから
 そういうふう
 に考えますと、
 一つの大きな
 方法論とい
 うものが
 生まれてくる
 ですね。例
 えば昨年の
 R.I.会長
 カルロ・ラ
 ビツァさん、
 この方は
 イタリアの方
 ですけども、
 すごい考
 え方と信念
 を持ってい
 らっしゃ
 います。す
 べて彼の
 テーマは「
 堅実・信
 望・持続」
 です。堅
 実という
 ことは今
 私が申し
 上げた
 ロー
 タリー
 の基本
 精神と
 基本
 構造

というものをしっかりと見直
 しましょうということ
 なんです。それが
 もっと言えば、
 ロータリーの
 組織の簡
 素化にも
 つながるし、
 効率化にも
 つながって
 いくんだと。
 それから
 信望という
 のは、さ
 っきから
 私が申し
 上げてい
 るように
 地域社会、
 国際社会
 でのロー
 タリーの
 評価とい
 うものを
 しっかりと
 勝ち取り
 なさい。そ
 こにまた
 一つの
 大きな
 ポイント
 がありま
 すよとい
 うこと
 ですね。
 ロー
 タリー
 の奉仕
 は思い
 やりの
 心とい
 います。
 私が
 ガバ
 ナー
 の時
 は
 グ
 レ
 ン・
 キ
 ン
 ロ
 ス
 さ
 ん
 が「
 S
 H
 O
 W
 R
 O
 T
 A
 R
 Y
 C
 A
 R
 E
 S
 」、
 「
 ケ
 ア
 ー
 」、
 とい
 う
 言
 語
 を
 言
 い
 ま
 し
 た。
 確
 かに
 こ
 れ
 は
 基
 本
 だ
 と
 思
 い
 ま
 す。
 そ
 の
 次
 出
 て
 く
 る
 言
 語
 は「
 シ
 ユ
 ア
 ー
 」、
 お
 互
 い
 に
 分
 け
 合
 い
 ま
 し
 ょう、
 分
 け
 与
 え
 る
 ん
 じ
 ゃ
 な
 く、
 自
 分
 が
 奉
 仕
 す
 る
 こ
 と
 に
 よ
 っ
 て
 自
 分
 が
 生
 か
 さ
 れ
 て
 る
 ん
 だ
 と
 い
 う
 考
 え
 方
 を
 ぜ
 ひ
 し
 て
 ほ
 し
 い
 と
 思
 い
 ま
 す。
 そ
 し
 て
 そ
 れ
 が
 色
 ん
 な
 意
 味
 で
 一
 つ
 の
 大
 き
 な
 エ
 ネ
 ル
 ギ
 ー、
 力
 に
 つ
 な
 が
 っ
 て
 く
 れ
 ば、
 そ
 れ
 が
 堅
 実・
 信
 望
 の
 持
 続
 が
 維
 持
 さ
 れ
 て
 い
 く
 じ
 ゃ
 な
 い
 か
 と、
 そ
 こ
 が
 ラ
 ビ
 ツ
 ヶ
 さ
 ん
 の
 非
 常
 に
 ポ
 イ
 ン
 ト
 を
 突
 いた
 考
 え
 方
 だ
 っ
 た
 な
 ど、
 彼
 の
 ス
 ピ
 ー
 チ
 を
 聞
 き
 な
 が
 ら
 そ
 う
 思
 い
 ま
 し
 た。
 今
 年
 の
 国
 際
 大
 会
 で
 色
 ん
 な
 デ
 ィ
 ス
 カ
 シ
 ョ
 ン
 が
 あ
 り
 ま
 し
 て、
 私
 は
 パ
 ネ
 リ
 ス
 ト
 を
 や
 ら
 せ
 て
 い
 た
 だ
 い
 た
 ん
 で
 す
 け
 ど
 も、
 21
 世
 紀
 の
 ロ
 ー
 タ
 リ
 ー
 は
 ど
 う
 な
 ん
 だ
 と
 い
 う
 意
 見
 で
 し
 た
 け
 ど
 も、
 そ
 の
 中
 で
 出
 て
 く
 る
 意
 見
 は「
 国
 際
 ロ
 ー
 タ
 リ
 ー
 は
 け
 し
 か
 ら
 ん
 じ
 ゃ
 な
 い
 か
 」、
 とい
 う
 意
 見
 な
 ん
 だ
 ね。
 我
 々
 と
 国
 際
 ロ
 ー
 タ
 リ
 ー
 は
 分
 離
 し
 て
 い
 る
 ん
 じ
 ゃ
 な
 い
 ん
 だ
 よ。
 我
 々
 が
 国
 際
 ロ
 ー
 タ
 リ
 ー
 を
 作
 っ
 て
 る
 ん
 だ
 よ。
 そ
 の
 考
 え
 方
 を
 し
 っ
 か
 り
 持
 っ
 て
 だ
 ね、
 自
 分
 の
 も
 の
 と
 し
 て
 発
 言
 し、
 自
 分
 の
 こ
 と
 と
 し
 て
 行
 動
 し、
 自
 分
 自
 身
 で
 組
 織
 を
 作
 っ
 て
 い
 け
 ば
 い
 い
 ん
 だ
 よ。
 そ
 う
 い
 う
 考
 え
 方
 を
 一
 体
 と
 な
 っ
 て
 し
 な
 い
 と
 ば
 ら
 ば
 ら
 な
 っ
 て
 活
 力
 を
 失
 っ
 て
 し
 ま
 う
 だ
 ろ
 う。
 だ
 から
 そ
 の
 考
 え
 方
 は、
 我
 々
 が
 21
 世
 紀
 に
 入
 る
 時
 に
 思
 い
 直
 し
 て
 見
 つ
 め
 直
 し
 て、
 そ
 し
 て
 奉
 仕
 活
 動
 そ
 の
 も
 の
 を
 も
 っ
 と
 地
 道
 な
 も
 の
 に
 し
 て、
 社
 会
 の
 評
 価
 を
 得
 る
 よ
 う
 な
 し
 っ
 か
 り
 し
 た
 も
 の
 に
 切
 り
 替
 えて
 い
 っ
 て、
 そ
 し
 て
 そ
 れ
 が
 大
 き
 な
 パ
 ワ
 ー
 と
 な
 っ
 て
 伸
 び
 て
 い
 く、
 そ
 う
 い
 う
 考
 え
 方
 な
 ら
 ば
 い
 い
 な
 ど、
 つ
 く
 づ
 く
 思
 っ
 て
 い
 ま
 す。

筒井パストガバナー

どうもありがとうございました。今お二人のご意見を聞いておりました、私も、今こそロータリー、ロータリーの重要性を非常に認識している者の一人でありまして、思いやりの心を行動に移すのがロータリーである、そういう心を養うのがロータリーであると言われておりますが、今会員が少なくなってきたのは景気が不況であるからという意見もありますが、こういう時にこそロータリーではないだろうか、私も思います。今日本を世界に誇れる国、世界の人々から尊敬される日本人になるためには、今日本人の心の問題、教育の問題が喧伝されております。時間が迫ってまいりまして、まとめが十分できないかもしれませんが、1974年、75年のR.I.会長にウィリアム・ロビンズさんという方がおられました。なぜこの方を私が覚えているかと申しますと、私が94年、95年のごぞいまして、20年前に74年、75年にウィリアム・ロビンズさんという方がおられまして、R.I.会長テーマ「ロータリーを奮い起こせ」というのがテーマのごぞいまして、その中で「ロータリーの第一の仕事は人を作ることであり、これ以上の大きな奉仕がロータリーにあるだろうか」ということを皆さんに訴えられたことを、皆さんの中にはご記憶になっている方もあるかと思っております。私もロータリーに在籍して40年になりましてロータリーから色々な教えや恩恵を受けてまいりました。これを企業経営に取り入れまして、従業員の育成を通じて地域社会に奉仕していこうと今がんばっているわけでございます。さて、人づくり、これは簡単に言えます。しかし、具体的にどのようにして人づくりをやっていくかということは、各皆さんの職場ごとに、あるいは職業の種類によって違うと思っております。ですが共通して言えますことは、企業のトップである皆さんは従業員そして家族の健康作りであるとか、あるいは従業員が平和で楽しい家庭を作るにはどうしたらいいかということをおぼろげに考えておられることと思っております。それではこれを具体的にどのように実行していくか、具体的に

行動に移していくかということをおぼろげに考えた場合に、私が本当にささやかではありますが、取り組んでいますことは、朝の仕事の始めに行ないますラジオ体操、昼の仕事の始めに行ないますラジオ体操、ラジオ体操を通じてまず従業員の人づくり、私も子供の時非常に虚弱な体質の男でございまして、学生時代には二学期を休んだことがありまして、それに端を発した自分の健康作りには非常に熱心になりました。戦後ずっと続けていることがございまして、そういう私の経験を通じまして、従業員の例えばラジオ体操を戦後ずっと続けておりますが、その先頭に立ちまして、ラジオ体操の手の挙げ方が悪い、体の曲げ方が悪いということをおぼろげに、今ごろはもう従業員も嫌わなくなってまいりまして、正しいラジオ体操をしなきゃいけないぞという気持ちになってまいりました。そういうふうにして、従業員のならばにその家族の健康作りに貢献していこうと。そして平和で楽しい家庭作り、今社会的に少年犯罪が多発していますし、家庭の崩壊に伴って、親が子供を殺したり子供が親を殺したりするような世の中になってまいりましたが、少なくとも我が社の従業員の中から起こしてはいかんぞということで、月に一回はそういう情報を提供しまして、従業員の家族の中からこういうのがないように努力しております。それが私の個人としての、地区またはクラブとして世界社会奉仕に挑戦していくべきではなろうかというふうにごぞいしております。と申しますのは、ちょうど94年95年から始めまして、天野パストガバナーの時にバリ島のタマンロータリークラブに、婦人移動検診車を寄贈いたしました。その後2年間は続けていこうと応援していこうということで寄贈してまいりました。ところがご存じのようにインドネシアは今政情が不安で、最初はチャーティ財団というのをやって、その財団で婦人移動検診車の運営をやっているといっていました。それができているかできていないか、今はっきりしていませんが私は反省しております。せつかく作った、そもそもチャーティ財団ができるようにアフターケア、

アフターフォローが足りなかったなということをおぼろげに反省しております。本年から国際奉仕のカウンセラーをやらせていただきまして、何とかこのタマンロータリークラブの婦人移動検診車の奉仕活動を、皆さんが自力でやっていけるようになるまで見ていてやらなければいけないのではないかと考えております。この世界社会奉仕というものなかなかクラブでやろうと思っても難しい。5年に一つずつプロジェクトを開発しまして、ガバナーが変わりまして少なくとも5年はアフターケアをしてやりまして、それが自力

更生できるようになりましたら、また新しい世界社会奉仕プロジェクトを決めていくと。例えばそういうふうにして世界社会奉仕にもう少し力を入れていきまして、世界から尊敬される日本、世界から敬愛される日本人になっていくための人づくり、それが必要なのではないかと思います。ちょうど時間になりまして、ロータリーは時間を守ることが非常に大切だと教えられてきましたから、この程度で打ち切りたいと思っております。皆さん、御静聴まことにありがとうございました。